

平成という時代が、今「失われた三〇年」として終わるとしている。國家の統治は破綻し、国民の統合は破壊され、日本の現状は衰退というよりは、没落と呼ぶにふさわしい状況になってしまった。そんな危機の根本原因を、「国体」だと喝破した政治学者・白井聰が今、注目を浴びている。『国体論 菊と星条旗』(集英社新書)を上梓した白井に、なぜ「国体」が日本の没落と関係するのかを聞いた。

なぜ今「国体」なのか

——白井さんは新著『国体論 菊と星条旗』で、「国体」をキーワードにして、明治維新から現在の安倍政権に至るまでの日本のありようを論じています。なぜ国体をテーマにしたのですか。

白井 国体といえど、「日本国は万世一系の皇統が支配する特別な国だ」との観念を指すというのが一般的な認識だと思います。一九四五年に日本が戦争に敗れたことで、国体の概念を中心とする価値観やシステムは解体された。実際、敗戦後に行われた諸改革は国体を否定するものでしたし、それは国際的な約束事でもありました。もし戦後の日本が国体を維持したまま国際社会に復帰するというなら、それは戦後のドイツが第三帝国(ナチス体制)のまま復帰するようなものです。

しかし、本当に国体は死んだのでしょうか。私はまったく逆の考えをもっています。国体は表面的に

は廃絶されたにもかかわらず、再編されたかたちで生き残った。そして、現在の日本が逼塞状況に陥っているのも、その国体に原因があるのではないか、と。——戦前の国体が皇統、すなわち菊ならば、「戦後の国体」は星条旗である、というのが本書のサブタイトルの意味合いです。アメリカが日本の「国体」であるという主張には、驚かされます。

白井 端的に言えば、天皇制とアメリカが結合した特殊な対米従属構造が、「戦後の国体」です。天皇制の頂点にアメリカが鎮座している、ということです。

Interview 国体と失われた三〇年 白井聰 (政治学者)



す。アフガニスタン政府はアメリカの傀儡であり、首都周辺の一部しか実効支配できていません。また、韓国は北朝鮮と休戦中とはいえ戦争状態にあります。これらの国のアメリカに対する依存度は日本よりも高いはずです。にもかかわらず、彼らは日本政府よりも強い態度でアメリカと交渉し、成果を上げているのです。

なぜ日本の政府に同じことができないのか。それは対米従属という事実そのものが、日本では否認されているからです。たとえば、日本では日米関係について語られるとき、「思いやり予算」や「トモダチ作戦」といったように、過剰に情緒的な言葉が用いられます。これらの中には、「日本とアメリカの関係は、眞の友情に基づいた特別なものである」といいう風に醸成する役目を負っています。ここで演出されているのは「アメリカが日本を愛してくれていい」という命題です。それにより、対米従属の事実が不可視化されています。拙著『永続敗戦論』(講談社+α文庫)で論じたように、戦後レジームの正統性の源泉は「敗戦の否認」ですから、敗戦のまことに結果である対米従属もまた、否認されなければならぬのです。

かくして、戦後の日米関係は、大日本帝国における天皇と国民の関係と相似形をなすことになります。

大日本帝国は「天皇陛下がその赤子たる臣民を愛してくれる」という命題に支えられ、その愛に命を懸けて応えることが臣民の義務であり名誉であり幸福であるとされました。ここにあるのは「国体」の本質である家族国家観ですが、家族の間で支配はない、という理屈によって、天皇が国民を支配しているという事実を否認させるものでした。

——それが今の日本の没落とどう関係するのか。

白井 ひとつには、アメリカに追随していることが、戦前の天皇制や家族国家観には多くの問題がありました。しかし、それでも日本社会に根づいたこの一五〇年の「国体」システムが機能した結果なのです。

和解のシンボルとしての天皇

——戦前の天皇制や家族国家観には多くの問題がありました。しかし、それでも日本社会に根づいたこの一五〇年の「国体」システムが機能した結果なのです。

白井 それは、この国体が近代的なネイショナル・ビルディングのための装置として、その時点ではそれなりにうまく機能したからです。

本では多くの血が流され、国民のあいだに分裂が生じました。それを再統合する機能を天皇制は担つたわけです。

これは乃木希典の一生を見ると明らかだと思いました。乃木は官軍の軍人になると、一八七六年に同郷の前原一誠が起こした萩の乱を鎮圧します。この乱には乃木の弟・真人や親戚の玉木文之進など、多くの近親者が加わっていました。乱の勃発に先立ち、真人は乃木を前原陣営に引き入れようと何度も説得を試みたそうです。しかし、乃木はこれを断り、弟